

Title	希望に関する概念の整理 : 心理学的観点から
Author(s)	大橋, 明; 恒藤, 暁; 柏木, 哲夫
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2003, 29, p. 100-124
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10319
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

希望に関する概念の整理
心理学的観点から

大 橋 明
恒 藤 暁
柏 木 哲 夫

希望に関する概の整理 心理学的観点から

大橋 明
恒藤 暁
柏木 哲夫

“希望”は人が生きていく上で必要不可欠なものであることが、これまで多くの研究者によって指摘されてきた (e.g. Fromm, 1968 / 1970; Lynch, 1965; Stotland, 1969)。しかしこの希望について、日本で心理学的な研究が行われ始めたのは最近のことである。第二次世界大戦前の心理学に関する論文題目を整理している心理学関係研究誌文献目録 (小山田・芦葉・深谷・中山・後藤・大井・斉藤・古川・宮本・橘・宮本・森・村瀬, 1989) には、希望 (hope; Hoffnung) という概念について検討した研究は掲載されていない。1975年に『児童心理』で特集「子どもの希望を育てる」が組まれたが、これが日本で希望が心理学的に扱われた最初であろう¹⁾。そこでは北村晴朗や小此木啓吾、鑪幹八郎、田畑治、台利夫ら各氏が希望についてそれぞれの立場から論じている。この『児童心理』に掲載された論文をもとに、北村 (1983) は『希望の心理 - 自分を生かす -』を記した。

1977年には、『青年心理』の創刊号にて特集「青年の希望」が生まれ、桂広介、小宮山要ら各氏が希望や時間について述べている。また、1990年には『教育と医学』でも「希望 - これからを生きる - 」という特集が生まれ、勝俣暎史、三好暎光、北山修ら各氏が論を重ねている。

その後、白井 (2001) による『希望の心理学 - 時間的展望をどうもつか -』が出版され、勉強出版の『Science of Humanity Bensei (人文学と情報処理)』(2001) では「希望の心理学」という特集が組まれた。そして、日本心理学会第66回大会 (2002) でも「希望の心理学」と銘打ったワークショップが開かれるなど、希望について心理学的に捉えようとする試みが近年頻繁になされている²⁾。

なぜ、現在これほどまでに希望を捉えようとするのだろうか。それは、先行きが不透明であり、ストレスの時代と表現される現代の時代背景と無縁ではないだろう。また、いつの時代でも「未来がみえない」と言われていたわけであるが、特に近年は自らの未来を切り拓くことが時代や社会から要請された切実な問題である (e.g. 白井, 2001; 渡辺, 2002) ことも、希望が扱われるようになった理由として挙げることができるかもしれない。しかし、希望とは捉えどころのない曖昧な概念である (Farran, Herth & Popovich,

1995)のために、アプローチし難い。また心理学ではポジティブなテーマよりもむしろネガティブなテーマに目が向けられていた(渡辺, 2001)。そのために、希望というものが心理学における研究の主題として、これまでそれほど扱われてこなかったと推察される。

本論では、希望について考察した主要な研究者の論を概観し、希望と類似概念との差異について吟味する。次いで、希望の定義に関する問題点を検討する。更に、高齢者の希望を考察するための予備的な研究を行い、その結果を報告する。

・希望とはなにか

1. 希望に関する主要な論

希望の定義についての整理は、これまで様々な研究者によって行われている(e.g. Benzein & Saveman, 1998; Farran et al., 1995; 勝俣, 1990; 北村, 1983; 渡辺, 2002)が、本論では4名の心理学者の論に焦点を当てたい。

希望に「期待」「目標」という概念を取り入れた研究者のひとりがStotland(1969)である。Stotlandは、辞書により希望の意味を検討し、希望がもつ意味の本質について期待の概念と統合可能であり、「目標に到達するというゼロ以上の期待(expectation)」(Stotland, 1969, p2)としている。

Stotlandは、ある目標に到達しようとする生活体の動機づけが、ある程度まで、目標到達について知覚された確率とその目標に関して知覚された重要性との正の関数であること、また目標に到達する確率と重要性が大きいと知覚するほど、生活体が経験するポジティブな感情も大きくなることを論じた。加えて、目標に到達する確率が低いと知覚し、かつ目標の重要性が大きいほど、生活体の経験する不安は大きくなることを指摘した。このように、Stotlandは希望を論じる上で、目標に到達する「確率」と、到達しようとする目標の「重要性」に焦点を当てた。このStotlandの論に依拠して、Ballard, Green, McCaa & Logsdon(1997)、Erickson, Post & Paige(1975)、Farran & McCann(1989)、Farran & Popovich(1990)などが研究を行っている。

この「目標」に認知的な視点を組み入れたSnyderら(e.g. Snyder, 1989, 1994a, 1994b, 1995, 2000; Snyder, Harris, Anderson, Holleran, Irving, Sigmon, Yoshinobu, Gibb, Langelle & Harney, 1991; Snyder, Hoza, Pelham, Rapoff, Ware, Danovsky, Highberger, Rubinstein & Stahl, 1997; Snyder, McDermott, Cook, & Rapoff, 1997; Snyder, Sympson, Ybasco, Borders, Babyak & Higgins, 1996; Babyak, Snyder & Yoshinobu, 1993)は、希望を目標到達への期待と同義として扱う文献をレビューし、従来の研究者が希望を目標に到達できるという一次元の構成概念として定義する一方で、その目標がどのように追求されるかについて詳述していないことを指摘した。その上で、希望をagencyとpathwaysについて相互に得られた感覚で構成される認知的なまとまりと定義した(Snyder et al., 1991)。agencyとは、目標到達に必要な活動を始めたり維持したりする

信念を指し、一方 pathways とは、目標に到達するための道筋を生み出すことができるという信念を示す (Snyder et al., 1996)。このように、Snyder らは、希望が「目標に向かっていく意志の強さ」と「目標に到達する可能性」に関する認知の相互作用で決定すると考察している。この Snyder らの考えに沿った研究も枚挙に暇がない (e.g. Ahmed & Duhamel, 1994; 青山・藤原・神山, 1993; Carvajal, Clair, Nash & Evans, 1998; Cramer & Dyrkacz, 1998; Irving, Seidner, Burling, Pagliarini & Robbins-S, 1998; 加藤, 2001; Onwuegbuzie, 1998; Onwuegbuzie & Daley, 1999; Range & Penton, 1994; 篠原・勝俣, 2000, 2001)。また、Snyder らの研究については、渡辺 (2002) が詳しく論じている。

しかし、希望を目標や期待とする論に対しての批判もある。北村 (1975, 1983, 2001) は、Lersch、Maisonnette、Fromm、Stotland などによる希望を吟味し、希望を特定の目的や目標の達成にかかわる願望や期待の場合と区別すべきことを指摘している。そして希望を「来るべき未来の状況に明るさがあるという感知に伴う快調をおびた感情。特定の目的の実現や、特定の目標への到達を目指すものではないが、人生の特定されない価値や意義が実現される視界または境域としての未来が信頼できるという明るい感情」としている。

また北村は、未来において到達しようとするものに至るまでに何が起こるかわからないために、「未来における実現・獲得・到達を求める」欲求や意志、「手を伸ばしただけでとらえられ、一歩踏み出しただけで到達できるものに対する」願望、「数時間・数日・何年後かの実現」を目指す意欲は、未来を信頼する感情である希望が存在しない限り、達成のための努力はほとんど期待できないものとして考察し、希望を未来への展望における基礎と捉えている。この北村による論に依拠して希望を捉えようと試みた研究は、大橋ら (大橋, 2002; Ohashi, 2002; 大橋・柏木・恒藤, 2002) によるもの以外にみられない。

そして、北村 (1983) も指摘した信頼感という視点から希望を取り上げたのは Erikson (e.g. Erikson, 1982; Erikson, Erikson & Kivnick, 1986; Evans, 1967/1981) である。Erikson (Erikson, 1982; Erikson et al., 1986) によると、希望は乳児期における基本的信頼と不信という葛藤やバランスから現れてくる。

この希望について、Erikson は Evans との対話の中で、「個体発生の諸段階において発達していく人間的関心事に対する全体的な見通し」であることを指摘している (Evans, 1967/1981, p19)。この希望の力は、「後に続く全ての心理社会的な力が健康的に発達するための支え」となり、「これまでの全ての心理社会的課題の再統合と非常に密接な関係がある」という (Erikson et al., 1986, p218)。また「状況や条件の変化の中で、生涯にわたる信頼と不信との闘争の故に、希望はしっかり発達しなければならないし、一生涯を通じて確かめられ、いくたびも肯定されなければならない」ことを指摘している (Evans, 1967/1981, p19)。すなわち、希望は信頼感を土台にして構築され、また希望の感覚は人生の初期に発達するが、その後の人生における発達段階のテーマを統合す

る基礎となる (Erikson et al., 1986) ことが示唆されている。

2. 希望と類似概念との相違

希望と類似する概念としては、楽観主義、願望、欲望などが挙げられる。

希望と楽観主義の差異については、幾つかの論がみられる。Fromm は希望を「まだ生まれていないもののためにいつでも準備ができていること」であり、「たとえ一生のうちにも生まれなかったとしても、絶望的にならないということ」とした (Fromm, 1968 / 1970, p27 - p28) 一方で、楽観主義を「ひょっとしたら最悪のことが起こるかもしれないということ認識する煩わしさを避けて、ただ最上のものを望む」こと (Fromm, 1968 / 1970, p44) とし、楽観主義と希望とを区別している。

また Maisonneuve (1948 / 1955) は、楽観主義がよい日が来るまで現在の苦しみに耐えることができると自負することを通して、現在置かれている悲劇の状態の意識化を拒否することとした。反対に希望は、貪欲な先見や楽天的な怠慢ではなく、忍耐や謙虚さをもつことであり、「信賴的で貪欲性のない期待」 (Maisonneuve, 1948 / 1955, p136) とした。

その他にも Snyder (1994a) は、どんなに悪い事象が起こったとしても、そのネガティブな面には目を向けずポジティブな面にのみ目を向けるという盲目的な楽観主義 (Pollyanna optimism) や、悪い事象が起こった時にその原因を外的・一時的・特異的に帰属する説明スタイルをもつ学習性楽観主義 (learned optimism) が希望と異なるとした。また、楽観主義は不安を減弱する有効な短期の防衛機制とも捉えられており (Farran et al., 1995) 楽観主義は希望とは異なるものであることが多く指摘されている。

このように、楽観主義は希望と比較された場合にネガティブな意味合いで使われることが多いが、Taylor (1989 / 1998) は、楽観主義への批判を否定し、自分の置かれている状況に対して楽観的な推測をし、ネガティブな出来事をコントロールできるという信念を持ち続けている人々が、自分の状況に適応していることを紹介している。Taylor (1989 / 1998) によると、このような「適応性のあるフィクション」を「positive illusion (ポジティブ幻想)」と表現するが、このポジティブ幻想はいつでも適応を促すのではない。誇大妄想は精神病理と関係していることからわかるように適応ではない (遠藤, 1998) また非生産的な楽観が適応には結びつかないことも指摘されている (Scheier & Carver, 1992) Seligman (1990) も、会社の運営を例に挙げて、楽観主義が全ての場面で有効ではないことを示唆している。

結局のところ、楽観主義やポジティブ幻想とは、未来を明るくみようとする「態度」や「姿勢」のことであろう。この態度によって希望が高まる (e.g. Seligman, 1990; 園田, 2001) ことは容易に想像できるが、希望そのものとは異なることが指摘できる。

希望と欲望・願望との差異であるが、欲望とは特定の対象に向かって突進し所有しようとするもの (Maisonneuve, 1948 / 1955) であり、未来における実現・獲得・到達を求

めるもの(北村, 1983)である。倉石(1981)も James, W. を引用して、欲望の実現が可能でないと感じた時は、その欲望を願望としている。斉藤(1985)は、愛や温かさ、喜び、前向きな明るさをもたらす、生きていくための力を生み出す実現可能な希望を「hope」とした。一方、現実とのギャップから孤独、不信、不安、怒りをもたらす実現不可能な夢のような希望を「wish」としている。Fromm(1968/1970)も、より多くの、よりよい車や家や小物類をほしがめる人が希望をもつ人ではないとして、希望が願望や欲望とは異なることを指摘している。このように、欲望や願望は特定の対象を入手しようとする点、不快な感覚をもたらす点で希望とは異なる(北村, 1983)と考えられる。

3. 希望の定義に関する問題点

希望の定義に関する問題点のひとつは、渡辺(2002)が指摘するように、希望が「感情」として捉えられるのか、あるいは「認知」として捉えられるのかということである。これについても様々な論がある。例えば Snyder は認知的な点を重視している。この理由について渡辺(2002)は、Snyder が感情という曖昧なものを排除しようと試みていること、また感情を目標を目指す思考の副産物として位置づけていることを挙げている。

それに対して北村(2001)は、根拠は明らかにしていないが、認知を強調する意見もあることを踏まえつつも、希望が感情であることを指摘している。Kast(1991)は、非常に広範囲にわたる実存的な感情として希望を捉えている。これらは感情としての希望を重視している立場と言えよう。一方 Lazarus(1999)は、感情としての希望、コーピング過程としての希望という視点から希望を捉えようとしている。「希望をもつ能力が生き生きとしたコーピングの源となり、このコーピングの過程は、感情としての希望に打ち立てられる」(Lazarus, 1999, p674)と述べるように、感情としての希望を基礎とし、認知としての希望の存在にも含みをもたせている。このような点を踏まえて渡辺(2002)は、暫定的にという制限をつけた上で、希望を「未来の見通しと期待に支えられて、現在において生じる肯定的な認知と感情の総体に関わる概念」(渡辺, 2002, p37)としているが、この定義には更なる注釈が必要であるということも論じている。

なお、Snyder 以前の研究者が述べる希望は感情として扱われる場合が多い。これは当時まだ「認知」という概念が流布していなかったことも考えられるが、希望が「認知」なのか「感情」なのかという点は今後検討していくべき課題である。

次に希望の定義に関する問題として挙げられるのが、希望とは「期待をもつ」ことや「目標がある」ことなのかという点である。なぜ「期待(expectancy, expectation; Erwartung)」という概念を用いて希望を説明するのだろうか。Stotland の論については言うまでもないが、渡辺(2002)が報告するように、心理学の辞典・事典においても、希望は未来の事象について望ましい結果となる期待によって特徴づけられるものとして扱われている。このように希望は目標や期待という語で説明されているが、希望と目標あるいは期待との間にはどのような同異があるのだろうか。

Lersch (1966) は、未来に関する中性の動的な感情 (Gefühlsregung) を期待としている。そして、人間の目指す人生・意義・意味の価値が実現される場 (Feld) としての未来に対する動的な感情が希望であり、未来愛 (amor futuri) のようなものであると指摘する (Lersch, 1966, p286 - p287)。Maisonneuve (1948 / 1955) も、希望を「未来を志向する。それは期待でもある」が、「それだけでは希望を定義するにはとうてい充分ではない」ために、「期待の他の形の間に希望を性格づける」ことが必要であるという (Maisonneuve, 1948 / 1955, p133)。

一方、北村 (1983) はこの Maisonneuve (1948 / 1955) による希望の定義を例に挙げ、欲望や意志と希望との差異を強調し過ぎることには否定的である。その理由として北村 (1983) は、欲望や意志の目標に到達するのは未来のことなので、そこにはまだ確定されない未来への信頼が前提にあることを挙げる。つまり、希望があってはじめて欲望や願望が成立するというを示唆している。同様に Kast (1991) は、期待がある特定の願望に焦点を当てたものであり、達成できない折の失望の原因になるものであるのに対して、希望とは期待を支え、期待を超越した、非常に広範囲にわたる実存的な感情であるという。Bollnow (1960 / 1969) も、希望と期待とが密接な関係にあることを踏まえ、期待していることは「全く明確に表象されている出来事」(Bollnow, 1960 / 1969, p127) であり、希望は不明確なものであると指摘しつつも、期待は一定の目標に向かって収縮された未来であるが、これは希望という開いた時間の中で存在し得ることを示唆している。また Bollnow (1960 / 1969) は、「私は～を希望し得る」と言い表すことができ、一定の内容をもった「相対的希望」と、一定の対象をもたず人間の心を満たす「絶対的希望」が存在すると述べている。相対的希望は特定の内容をもつゆえに実現する場合もあり実現しない場合もあるが (中野・中野, 1988)、絶対的希望は無形性的であり (Bollnow, 1972)、特定の内容をもたないために幻滅させられることはないという (中野・中野, 1988)。さらに Dufault & Martocchio (1985) は、ある望ましい状況になり得るという「個別の希望 (particularized hope)」と、未来に対する漠然とした感覚である「総合的希望 (generalized hope)」の2種類があるとしている。総合的希望は、人が個別の希望を剥奪された時に絶望から守り、過去・現在・未来における人生の意味 (meaning of life) を保護しあるいは取り戻すものであり、個別の希望の枠を超えて、希望をもつ人を守る無形の傘のようなものであるという。

Bollnow (1960 / 1969, 1972) の場合でも Dufault & Martocchio (1985) の場合でも、具体的な対象が設定されている相対的希望あるいは個別の希望は、目標到達への期待あるいは願望と類似するところがあるように思われる。反対に、絶対的希望あるいは総合的希望は、明確な対象が存在しない。これらのことから、この両者の示唆する希望は北村 (1983) の論と類似する部分がある。

このように、希望は期待や目標とは区別される傾向がこれらの論から窺われ、また希望が期待や願望の基礎となるという考察もみられることから、期待あるいは目標は希望

の一部分として捉えることは可能なものの、希望を十分に示す概念ではないことを示唆しているように推察される。

一方、既述したように Stotland (1969) は目標に到達するという期待を希望と捉えている。また、「ある望まれた結果が起こるであろうという自信に満ちた期待を伴うもの」(Farber, 1968 / 1977, p11) と、やはり具体的な対象を得ることができるという期待を希望としている論もある。加えて Snyder は目標に関わる認知を希望として提示し、様々な研究を積み重ねている。勝俣 (1993) も希望を「将来ないし未来において、望ましい何かが実現ないし達成されることについてこいねがい、望むことであって、期望(期待して望むこと)、祈望(祈り願うこと)、企望(くわだてのぞむこと)、冀望(こいねがい、記すこと)を包含するもの」(勝俣, 1993, p274) とした上で、Snyder et al. (1991) の Hope Scale を用いて研究を行っている。

希望が目標到達や期待という概念で説明されている点について、Snyder の論を詳しく吟味した渡辺 (2002) によると、これまでの希望に関する研究があまりにも曖昧なものを取り扱っているという懐疑的な眼差しを受けてきたことを Snyder は意識している。そして堅実な方法的基盤に基づいた実証的資料、つまり目標や目標の価値の検討によって、疑惑に満ちた視線に応える必要があったと渡辺 (2002) は考察している。このように、希望という概念を扱う際の問題は、希望というものがもつ曖昧さをどのように排除するかということと深く関わっているように思われる。

実際、心理学の領域では Snyder や Stotland の論が用いられていることが多い (e.g. Ahmed & Duhamel, 1994; 青山・藤原・神山, 1993; Carvajal et al., 1998; Cramer & Dyrkacz, 1998; Irving et al., 1998; 加藤, 2001; Onwuegbuzie, 1998; Onwuegbuzie & Daley, 1999; Range & Penton, 1994; 篠原・勝俣, 2000, 2001)。心理学は科学であるという立場から、客観的な指標、目にみえる行動を扱う必要があるゆえに、期待や目標という構成概念を用いて希望を捉えざるを得ないのではないだろうか。つまり、希望という曖昧な概念をそのまま扱うことで、何を捉えようとしているのか不明になってしまうことを回避するために、より具体的な定義を採用する期待や目標という概念を用いて希望を捉えようとしていることがひとつの理由として考えられる。

またこの立場での研究では、対象を児童期・青年期や成人期とする場合が多い。児童期は未来を重要だと考え、青年期では目標手段関係の認知が発達し、自我同一性の達成には社会的自立という目標を目指した行動が重要になり、成人期では目標指向性が青年期よりも高くなる (白井, 1997) という発達の側面をもつ対象だからこそ、Snyder や Stotland による希望が採用されることは順当な流れなのかもしれない。

しかしながら、これまで希望を明確にしようと試みてきた諸家の論を考慮すると、希望と期待や目標到達とは異なる部分があることが指摘でき、目標や期待を明らかにすることが希望を明らかにすることにはなり得ないのではないだろうか。

一方、心理学でも感情として希望を捉える立場や、看護学、哲学の領域では、より広

がりのある概念としての希望を採用している場合が多い(e.g. Benzein & Saveman, 1998; Bollnow, 1960 / 1969, 1972; Dufault & Martocchio, 1985; Herth, 1991; 射場, 2000; Lersch, 1966; Meisonnueve, 1948 / 1955; Plummer, 1988)。看護学の雑誌に掲載されている Farran & Popovich(1990)や Farran & McCann(1989)、Rideout & Montemuro(1985)では、Stotland(1969)の定義のみならず、「困難から抜け出る方法がある、物事がうまく運べる、人々が内的・外的現実は何とかして対処しやり遂げることができる、特に疾病から抜け出る方法があるという、極めて普遍的な生物学的・生理的な感覚での“解決法”である根源的な認識と感情」(Lynch, 1965, p32)という希望の定義をも採用しており、柔軟に希望を捉えている。

看護学の領域で柔軟な定義が採用されたことについては、疾病を抱えている患者や高齢者を対象としたため、対象者の全人的な理解やケアを目指したところにその根拠があるのかもしれない。また、高齢者では目標指向性は減少し、将来無関心が増大するという指摘(白井, 1997)や、喪失体験を重ね、幾つもの健康問題を抱え、自分で自分の面倒をみる能力の低下を体験しているかもしれない高齢者を対象とした場合は、達成や成功、統制と関連づけて希望を定義することには疑問が生じるという指摘(Farran, Salloway & Clark, 1990)がある。これらのことから、目標到達や期待とした希望よりも、より広がりのある希望を採用することが適当である可能性もある。しかし、これらの領域で扱われる希望の場合、実際にこの心の動きをどのように共通理解のものとして捉えることができるかという問題が伴う。つまり、何を捉えようとしているのか不明確になる可能性が捨て切れない。希望の定義に曖昧さを残してしまい、厳密さや客観性に欠けることも考えられよう。

希望を定義するという事は悩ましい課題であり、心理学という学問の中で希望がこれまで扱われなかった所以でもあると推察される。希望の本質を損ねることがなく、かつ曖昧さを排した定義の構築が今後に望まれる課題である。

・希望に関する予備的研究 - 高齢者を対象として -

1. 序論

このように概観してきた希望であるが、実際にどのような事象に伴ってもたらされ減弱していくのかについての研究は乏しい。Gaskins & Forté(1994)は、65～95歳の地域社会に居住する高齢者12名を対象として、希望を与えてくれる事物をカメラで撮影するよう求め、その現像写真を元に面接を行った。その結果、希望が他者との交流、信仰、健康の維持、積極的な感情(positive emotion)などから生じていることを指摘している。また、地域社会に居住する10名の高齢者を対象とした小泉・足高・大黒(1998)は、Gaskins & Forté(1994)の手法を用いて検討を行ったところ、他者との交流、健康、趣味、仕事・役割、自然・信仰、経済的保障、子どもたちの成長、積極的な感情などが高

齢者の希望を高めるとしている。反対に高齢者の希望を弱める原因としては、健康障害、重要な他者や経済基盤の喪失、家族関係、今の政治、プライドを傷つけられることなどが挙げられている（小泉・伊藤・宮本，1999）。以上のような研究が散見できる程度である。

そこで本研究では、自由記述法を用い、高齢者の希望をもたらしたり弱めたりする事象と、その際に生じる感情をできる限り広く抽出することを目的とした。

本研究では高齢者を対象とするが、期待あるいは目標が希望を十分に示す概念ではない可能性があることや、白井（1997）および Farran et al.（1990）の指摘を踏まえ、本研究における希望を北村（1983）に従い、「来るべき未来の状況に明るさがあるという感知に伴う快調をおびた感情。特定の目的の実現や、特定の目標への到達を目指すものではないが、人生の特定されない価値や意義が実現される視界または境域としての未来が信頼できるという明るい感情」（北村，1983，p21）とした。希望があるということは、その程度の差異はあるにせよ、未来を明るいと感知することが前提にある。それゆえ、希望が何から生じるのかについて、「どんな時に、未来に明るいさを感じますか」「どんな時に、これから先どうにかなると思いますか」「どんな時に、これから先の見通しは明るいと思いますか」「どんな時に、将来に可能性があると思いますか」と問うことは、希望をもたらず事象に関して明らかにするためには有効であると考えられる。

一方、希望が減弱した際は、抑うつ症状がみられたり、自殺念慮がみられたりする（e.g. 勝俣，1990；Lester，1998；Range & Penton，1994）。従って、希望が減弱する原因について、「どんな時に、もうどうにもならないと感じましたか」「どんな時に、これから先の見通しがまったく立たないと感じましたか」「どんな時に、生きていくのが嫌になりましたか」と問うことは、希望を減弱させる事象に関して尋ねるために適切な問いであると推測される。

加えて、その際どのような感覚を抱いたかについて事象と平行して尋ねることは、北村（1983）が述べる「未来に明るさがあるという感知に伴う快調をおびた感情」³⁾を明らかにするためには有効な問いであると考えられる。

2. 方法

(1) 対象者

G 県内に在住する60歳以上の高齢者200名を調査対象とした。回答の得られた130名（回収率65.0%）のうち、記述に不備や無記入が認められた6名を除いた124名を分析対象とした。平均年齢は68.0歳（SD = 5.56）、そのうち男性は69名であり、平均年齢68.3歳（SD = 5.65）であった。一方女性は55名、平均年齢67.7歳（SD = 5.49）であった。

なお、対象者のうち68名（54.8%）は、G 県が主催するシルバー大学講座に参加する高齢者である。このシルバー大学講座とは、高齢者に幅広い学習の場を提供することと地域リーダーの養成を図ることを目的として開講されたものである。残りの56名（45.2

%)は、G県老人クラブ連合会の下位組織である各市町村の連合会に所属する高齢者である。老人クラブとは、高齢者が健康づくりやレクリエーションなどに取り組むことを通して、高齢者自身の生活を健全で生きがいのある豊かなものとするを目的とした自主的な組織である(全国老人クラブ連合会, 1995)⁴。

(2) 方法および手続き

自由記述法を用いた。まず希望をもたらす事象については、「あなたは、どんな時に、未来に明るいさざしを感じますか」「どんな時に、これから先どうにかなると思いますか」「どんな時に、これから先の見通しは明るいと感じますか」「どんな時に、将来に可能性があると感じますか」と問い、自由に記述することを求めた。また、その際の心境についても併せて記述するよう求めた。希望を弱める事象については、「どんな時に、もうどうにもならないと感じましたか」「どんな時に、これから先の見通しがまったく立たないと感じましたか」「どんな時に、生きていくのが嫌になりましたか」と問い、自由に記述することを求めた。この場合も、希望をもたらす事象について尋ねた時と同様に、記述した事象を体験した際の心境を記述させた。調査用紙は対象者に直接配布し、郵送により回収した。

3. 結果および考察

記述された事象およびその際の感情については、希望をもたらす事象、希望を弱める事象のそれぞれで内容を検討した。

(1) 希望をもたらす・弱める事象の内容

高齢者は身体・精神の健康の喪失、経済的自立の喪失、家族・社会とのつながりの喪失、生きる目的の喪失を体験し(長谷川, 1975)、これらの喪失体験は高齢者を抑うつにし、心理的動揺を起こしやすくさせる(芝・市川, 1990)。また高齢者は、収入の減少や配偶者の死や病気などの経験を通して、新たな暮らし方を学ばなければならない(Havighurst, 1953/1969)。その一方で、生きがいをもって暮らすためには、家族関係、夫婦関係、友人関係、地域社会や隣人とのつきあいや趣味、仕事、健康が重要である(e.g. 奥村・米村・多久・蜂谷・平野, 1995; 総理府内閣総理大臣官房広報室, 1993)。加えて、自然や宗教に関わること、重要な他者の喪失も希望を変化させる(小泉ら, 1998, 1999)。

そこで、高齢者の希望がどのような事象に随伴してもたらされるのか、あるいは減弱するのかをみるために、記述された希望をもたらす事象と、希望を減弱させる事象とを、自分や家族の健康状態に関すること、家族関係に関すること、友人関係に関すること、社会問題に関すること、経済状態に関すること、趣味に関すること、自然・宗教に関すること、死に関すること、仕事に関することに分類した。このカテゴリーに従って、記述された事象について3度ランダムに強制分類し、そのうち同じカ

Table 1 希望をもたらす事象・希望を弱める事象について記述された内容

希望をもたらす事象の記述例	カテゴリー	希望を弱める事象の記述例
健康で、普通の生活ができる時 善玉のコレステロールが人一倍多いと言われた時 家族全員が健康で明るく仲良く暮らしている時	健康	病気やケガ・入院をした時 体の動きに機敏さがなくなったと感じた時 物忘れが激しくなったと感じた時 歯が悪くなり、柔らかいものしか食べられない時 寝たきりの親の看病が続いた時 家族が事故に遭ったり病気をした時
孫と遊んでいる時 家族と話し合っている時 弟、妹、子どもたちの優しい言葉や態度に触れた時 孫の元気な姿をみた時 子どもや孫が順調に暮らしている報告を受けた時 孫の成長や元気に遊んでいる姿をみた時	家族関係	夫・妻と意見・考えが合わなかった時 自分の意見を言っても聞いてもらえない時 家族で喧嘩をした時 孫に相手にされなかった時 家族の役に立てなかった時 夫から離婚の話が出て離婚した時 親が痴呆になった時
茶の湯の仲間とお茶事をする時 スポーツで、仲間と練習、試合に出場する時 友人とおしゃべりをしている時 友人とレストランで会話している時	友人関係	集まりのメンバーの不満やいじめが多くみられた時 仲間の嫌がらせで集まりの仕事を辞めさせられた時 病に侵された友人の気持ちがわからなかった時
阪神大震災の時のボランティアの人をみた時 ニュース、新聞などで明るい話を耳にした時	社会問題	国会や官僚の態度をテレビでみた時 年金の減額が予想される報道を聞いた時
収入があった時	経済状態	働くことが出来なくなって収入の道が途絶えた時 年金の契約時に、受取金が大幅に減額された時 交際費など出費がかさんだ時
ゴルフをしたり、ジョギングをしたりしている時 家庭菜園や花作り、お稽古事をしている時 講演会やシルバー大学に参加している時 旅行に行っている時	趣味	(なし)
花壇の花の手入れや、咲いた花をみつめている時 小動物と話をしているような気分になった時 家庭菜園で野菜が豊作だった時 お寺を巡拝している時	自然・宗教	(なし)
(なし)	死	夫・妻を亡くした時 きょうだい・両親・実子を亡くした時 親しい人・頼りにしていた人が亡くなった時
会社で仕事をしている時	仕事	仕事を辞めた時 事業に失敗した時

テゴリーに2度以上分類されたものを採択した。

事象内容は希望をもたらす事象、あるいは希望を弱める事象として記述された内容をTable 1に示した。

希望をもたらす事象については、「健康」「家族関係」「友人関係」「社会問題」「経済状態」の他に、「趣味」「自然・宗教」「仕事」に関する事象が記述された。具体的には、健康であることを示唆された時(健康)や、孫と遊んでいる時(家族関係)、家族の優しい言葉や態度に触れた時(家族関係)、仲間とおしゃべりをしている時(友人関係)、講演会参加に参加している時(趣味)、旅行に行っている時(趣味)、花壇で咲いた花をみつめている時(自然・宗教)、会社で仕事をしている時(仕事)などが、希望をもた

らす事象として記述された。これらの結果から、ライフイベントではなく、日常体験されるようなポジティブで瑣末な事象が希望を高めていることが指摘できると考えられる。

一方、希望を弱める事象についても、「健康」「家族関係」「友人関係」「社会問題」「経済状態」の他に「死」「仕事」に関する事象が記述された。記述された内容を細部まで検討すると、病気やケガ・入院をした時（健康）や離婚した時（家族関係）、配偶者・きょうだいなど身近な人を亡くした時（死）、仕事を辞めた時（仕事）というライフイベントが希望を弱めていることが示された。加えて、物忘れが激しくなったと感じた時（健康）、やわらかいものしか食べられない時（健康）、孫に相手にされなかった時（家族関係）、家族の役に立てなかった時（家族関係）、仲間の不満やいじめが多くみられた時（友人関係）など、ライフイベントとまではいかないネガティブで瑣末な事象も希望を弱めていることが認められた。

このように、希望とは人生の節目に起こるような大きな衝撃を伴うライフイベントだけではなく、普段体験するような些細な出来事によって変化することが示唆された。つまり毎日の生活の中で希望は変化することが明らかとなった。希望とは日々の生活の中で生まれ失われるという側面をもつものであると言えよう。

(2) 希望をもたらす・弱める事象を体験した際に伴う感情

希望をもたらす事象や希望を弱める事象を体験した際にどのような感情が生じるかについて、記述された内容を KJ 法（川喜田，1967，1970）に基づいて分類した。

Table 2 は、希望がもたらされる事象を体験した際、どのような感情を得るかについてまとめたものである。内容は、『時間に対する快調な感情』『積極的な感情』および『自己の一体感』という3つのカテゴリーに分類された。

『時間に対する快調な感情』とは、その時その時点における過去・現在および未来へのポジティブな感情を示す。「未来に対する感情」「現在に対する感情」「過去に対する感情」から構成される。「未来に対する感情」は、将来は必ずよくなる、不安がないなどといった、未来への明るい思いについて記述されたものである。「現在における感情」とは、気分がすっきりした、幸せを感じる、安心感、温かい気分、穏やかな気分などといった、事象を体験した現在という時点に対して得られた快の感情と言える。「過去に対する感情」とは、若い頃の気持ちになる、楽しい少年時代に帰るなどといった、事象を通して過去の自分を想起し快の感情を得ることであり、それが未来への明るさをもたらしている。

次に、『積極的な感情』は「高揚感」と「目標へ向かう意欲」からなる。「高揚感」は、気力が湧いている、励みが出るなど、具体的な対象は示されていないが、内的に高まっているという感覚である。「目標へ向かう意欲」は、知識欲が湧いてくる、頑張りたい、競争心が出るといった何らかの対象を目指そうという感覚であり、ここでは、目的追求や自発的な活動性（北村，1963）に関わる感情が含まれると言えよう。

Table 2 希望をもたらす事象を体験した際の感情

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的な記述
時間に対する 快調な感情	未来に対する感情	将来は必ずよくなる 不安がない 未来に対する期待をもつ 将来の希望が湧いてきた
	現在に対する感情	気分がすっきりした 幸せを感じる 安心感 温かい気分 嬉しい 穏やかな気分 心が和む 楽しい
	過去に対する感情	若い頃の気持ちになる 楽しい少年時代に戻る
積極的な感情	高揚感	気力が湧いている 励みが出る
	目標へ向かう意欲	知識欲が湧いている 頑張りたい 競争心が出る 闘争心が湧く
自他の一帯感	他者との一帯感	周囲の人に感謝 救われる 自分ひとりで悩むことはない 一緒にいると満ち足りた気分になる 誰かに分けてあげたい
	超越者・自然との一帯感	神仏に感謝 動物・植物に癒される 太陽や宇宙に手を合わせられる
	人生の統合	人生は楽しい・素晴らしいものだ 人生に張り合いがある

『自他の一帯感』は、自分と他者・超越者、自分の人生との一帯（ひとつづき・ひとつじ）感を示す。「他者との一帯感」「超越者・自然との一帯感」および「人生の統合」から構成される。「他者との一帯感」は、周囲の人に感謝、救われる、自分ひとりで悩むことはないなど、家族や友人をはじめとする周囲の人との関係を通して得られるポジティブな感情である。「超越者・自然との一帯感」は、神仏など超越者とのつながりや、収穫・動植物とのふれあいを通して得られる快の感情である。「人生の統合」は、生きていてよかった、人生は楽しい・素晴らしいものだといった、個人の過去・現在・未来という時間を統合する、つまり人生全体をつなげまとめた感情である。

一方、希望が弱まる事象を体験した際、どのような感情が随伴するかについては Table 3 に示した。内容は、希望がもたらされる場合と同様に、『時間に対する不快な感情』『前向きな感情の停滞』および『自他の乖離感』という3つのカテゴリーに分類された。

『時間に対する不快な感情』は「未来に対する感情」「現在に対する感情」および「過去に対する感情」からなる。「未来に対する感情」は、お先真っ暗、絶望的な気持ちといった、未来に対する不快な思いについて記述されたものである。「現在に対する感情」は、淋しい、はかない、悲しいなど、事象の体験を通して覚知された現在に対するネガティブな感情を示す。「過去に対する感情」では、何のために今までやってきたのかといった、過去の積み重ねに対する否定の感情について記述されたものである。

『積極的な感情の停滞』は、「無力感」と「死の望み」で構成される。「無力感」は、

Table 3 希望を弱める事象を体験した際の感情

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的な記述
時間に対する 不快な感情	未来に対する感情	お先は真っ暗だ 絶望的な気持ち 将来に不安
	現在に対する感情	淋しい はかない 悲しい 不幸 世の無常を感じる 落胆した あきらめの気持ち 心細い
	過去に対する感情	何のために今までやってきたのか
積極的な感情の 停滞	無力感	気力が減入る もどかしい どうすることもできない
	死の望み	生きる望みがない 早く死にたい 自殺したい 生きる気持ちをなくした このまま目がさめなければよい 長生きするのがイヤになった
自他の乖離感	他者との乖離感	どうしてわかってくれないのか 遺されて淋しい 裏切られた どうしてこの人と結婚したのか
	超越者との乖離感	神も仏もない
	統合の失敗	人生に意味はなかった 苦しいだけの一生だった 楽しみのない人生の始まり

気力が減入る、どうすることもできないなど、自発的な行動を起こす意欲が欠落し、身動きの取れない思いを示したものである。また「死の望み」は、意欲としても理解可能であるが、意欲の向かう対象が「死」であり、早く死にたい、生きる気持ちをなくした、自殺したいなど、ネガティブな感情として捉えられる。

『自他の乖離感』は、「他者との乖離感」「超越者との乖離感」「統合の失敗」からなる。「他者との乖離感」は、どうしてわかってくれないのか、遺されて淋しいなど、家族や友人との関係の断絶感を示したものである。「超越者との乖離感」は、神も仏もないといった超越者への不信の感情である。「統合の失敗」は、人生に意味はなかった、苦しいだけの一生だったといった、自分の人生をまとめ、ひとつのものとできない思いを示す。

このように、希望がもたらされる事象を体験した際には、未来に対する明るさのみならず、過去・現在における快調な感情が生じていることが示された。また、高揚感、目標に向かう意欲から構成される積極的な感情や、他者や神仏・自然などとのつながり、更には自分の人生の統合（つながり）に関する感情も生じていることが認められた。一方、希望が弱くなる事象を体験した際は、やはり未来に対する暗さのみならず、過去や現在、人生全般に対する負の感情も生じていた。また、無気力が生じ、積極的な感情が生じたとしても死への望みが記述され、他者や神仏ともつながり感が弱化し、自分の人生もまとめあげることができていないことが示された。つまり、希望がもたらされる時と弱まる時とでは、時間に対する感情、積極的な感情、自他の一帯感において、概ね正

反対の感情が生じていることが認められた。このように、希望は未来が明るいという感情であるが、そこには積極的な感情や自他の一帯感が伴っていることが推測できる。

これまでの研究において、希望の要素・特質として様々なものが挙げられてきた。例えば、未来に対するポジティブな感情 (e.g. Lange, 1978; Macquarrie, 1978; Stoner & Keampfer, 1985) 次の秒、週あるいは遠く離れた未来に向けられたもの (e.g. Godfrey, 1987; Moltman, 1967; Stephenson, 1991) が指摘されているが、本研究で提示された『時間に対する快調な感情』と重なる部分があろう。また不屈の精神 (Fromm, 1968 / 1970) 絶望のアパシーと闘う活力 (e.g. Lange, 1978; Menninger & Pruyser, 1963) 目標到達への期待 (e.g. Stotland, 1969) と『積極的な感情』は対応する。そして自己や他者を含むもの (e.g. Nowotny, 1989) 世話、分かち合い、信用、無条件の愛、憧れや必要とされる感覚 (e.g. Lynch, 1965; Marcel, 1962) と『自他の一帯感』とは符合する部分がある。

このように、本研究で示された「未来に明るさがあるという感知に伴う快調をおびた感情」は、これまで指摘されてきた希望の要素・特質を網羅するものであると考えられる。

(3) 本研究の問題点と今後の課題

本研究は、自由記述法によって高齢者の希望をもたらす・弱める事象について、またそれらの事象に伴って生じる感情について探索的に検討してきた。しかし、高齢者の自由記述によるものであり、どのような事象が高齢者一般に影響を及ぼすのかについては吟味できていない。また、ライフイベントや日常生活の出来事は高齢者の心身に影響を及ぼす (e.g. 下仲・中里・河合・佐藤・石原・権藤, 1995; Weinberger, Hiner & Tierney, 1987) ことも指摘されており、数量的な分析も必要である。

希望についても同様である。北村 (1983) は、願っていた事柄に成功が予想される時は、未来そのものが輝くように感じられる場合があり、未来が全く暗いと思っていた時に僅かな明るさがみえてくる時があることを指摘する。確かに、人間の生活の中で、未来について明るい光があるように感じる時もあれば、全く先のみえない暗闇のように覚知する場合もある。また未来が暗いと感じる中で、一筋の光を見出して前に進むということも日々体験されることである。つまり個人が感じる希望には強弱のあることが推察される。従って、希望は数量的に測定することも可能であろう。なお、希望を測定する尺度は幾つか散見できるが (e.g. Erickson et al., 1975; Gottschalk, 1974; Herth, 1991, 1992; Mercier, Fawcett & Clark, 1984; Miller & powers, 1988; Nowotny, 1989; Nunn, Lewin, Walton & Carr, 1996; Obayuwana, Collings, Carter, Rao, Mathura & Wilson, 1982; Raleigh & Boehm, 1994; Snyder et al., 1991, 1996, 1997b; Stoner, 1982) そのひとつである Herth Hope Scale (Herth, 1991) は日本語に翻訳され、高齢者を対象として信頼性および妥当性が確認されている (大橋, 2002) 。また本研究でみられた時間に対する快調な感情、積極的・前向きな感情、自他の一帯感について検討することができる。この測度を用いての検討も可能であろう。

・ 総 論

“希望”は人が生きていく上で必要不可欠なものであるが、これまで日本ではそれほど研究が積み重ねられてきたわけではない。本論では、希望の概念について主要な論を概観した。Stotland(1969)は目標に到達するという期待とし、Snyder et al.(1991, 1996)はこの目標に認知の視点を組み入れた希望を提言した。一方、北村(1983)は目標の達成に関わる願望、期待などは希望と異なることを指摘した。また、未来を信頼する感情である希望を、欲求や意志、願望、期待など未来への展望の基礎とした上で「来るべき未来の状況に明るさがあるという感知に伴う快調をおびた感情」と定義した。この信頼感という視点から希望を取り上げたErikson et al.(1982, 1986)は、希望を人間的関心事に対する全体的な見通しとして捉え、基本的信頼と不信というバランスから生じてくるとした。

このような希望であるが、未来を明るく捉えようとする楽観主義や、特定の対象を手しようとし不快な感覚をもたらす願望、欲望とは異なる。しかし、これまでの様々な研究者の論を概観すると、希望を「感情」と捉えるか(e.g. Kast, 1991; 北村, 1983)、「認知」として捉えるか(e.g. Snyder, 1989)あるいは感情と認知の総体的な概念として捉えるか(e.g. Lazarus, 1999; 渡辺, 2002)という点で検討していく必要があることが示唆された。また、希望は「期待」や「目標」という概念で説明できるのかという問題もある。近年の心理学では、Snyder et al.(1991, 1996)やStotland(1969)による目標や期待を重視した定義を採用する研究が多くみられる。一方、心理学でも感情として希望を捉える立場や、哲学、看護学では、目標や期待を希望と区別する(e.g. Lersch, 1966)傾向もあれば、希望の一側面として採用している論(e.g. Bollnow, 1960/1969; Dufault & Martocchio, 1985)もみられるなど、より広がりのある定義が採用される傾向にある。前者では希望の曖昧さを排除しようとする姿勢が窺われるが、希望そのものを十分に説明していない可能性があり、後者で扱われる希望は曖昧であるために何を捉えようとしているのかが不明確になる可能性がある。

本論では北村(1983)に依拠し、高齢者を対象とした研究の第一段階として、高齢者の希望をもたらす事象、希望を減弱させる事象、またこれらの事象を体験した際に随伴する感情について、G県に居住する124名を対象に自由記述法を用いて探索的に検討した。その結果、希望をもたらす事象として、健康、家族関係、友人関係、社会問題、経済状態、趣味、自然・宗教および仕事、希望を弱める事象としては、健康、家族関係、友人関係、社会問題、経済状態、死および仕事記述された。また、希望をもたらす事象に随伴して、時間(過去・現在・未来)に対する快調な感情や、積極的な感情、自他の一帯感が生じていること、希望を弱める事象には、時間に対する不快な感情、積極的な感情の停滞、自他の乖離感が生じていることが認められた。

これらの探索的研究の結果、希望は、死別や健康の喪失などいわゆるライフイベント

と呼ばれる大きな事象だけによって変化するものではなく、日常体験するような瑣末な事象によっても変化する可能性があるということが示唆された。つまり希望とは、日々の生活の中で育まれ、失われていく性質をもつものである。そして、希望は、未来が明るいという感情であるが、積極的な感情や自他の一帯感を伴うものである可能性も指摘できよう。

注

- 1) 論文題目に「希望」と記した研究者には橋田(1953)や返田(1964)など散見できるが、希望とは何かということを吟味したものではない。
- 2) 学会ではないが、心理科学研究会では2001年に「希望の心理学」についてのディスカッションが渡辺弘純氏(愛媛大学教育学部)を中心として行われた。
- 3) 北村(1983)は、欲望・意志や願望などと希望との差異を強調し過ぎることに疑問を呈し、希望の存在の上に欲望・願望が成立すると捉えた上で、希望を「未来の状況に明るさがあるという感知に伴う快調な感情」と定義した。つまり北村が述べる「快調な感情」には欲求や願望を表層とした希望を含める意図があったことも推察される。しかし、これまで様々な研究者から「世話」「分かち合い」など多様な希望の側面が指摘されていることを踏まえ、本論では「快調な感情」を未来へ向けられたものと限定せず、より広範囲に捉えることを目指した。
- 4) 本研究では、シルバー大学講座参加者および老人クラブ加入者を対象としたが、この2グループ間で回答の偏りはみられなかった。

引用文献

- Ahmed, S. M. S., & Duhamel, P. 1994 Psychometric properties of the scale of individual differences : Measure of hope. *Psychological Reports*, 74, 801 - 802.
- 青山和雄・藤原武弘・神山貴弥 1993 希望の個人特性に関する尺度構成 日本グループダイナミックス学会第41回大会発表論文集, 194 - 195.
- Babyak, M. A., Snyder, C. R., & Yoshinobu, L. 1993 Psychometric properties of the Hope Scale : A confirmatory factor analysis. *Journal of Research in Personality*, 27, 154 - 169.
- Ballard, A., Green, T., McCaa, A., & Logsdon, M. C. 1997 A comparison of the level of hope in patients with newly diagnosed and recurrent cancer. *Oncology Nursing Forum*, 24, 899 - 904.
- Benzein, E., & Saveman, B. -I. 1998 One step towards the understanding of hope : A concept analysis. *International Journal of Nursing Studies*, 35, 322 - 329.
- Bollnow, O. F. 1960 *Neue Geborgenheit : Das Problem einer Überwindung des Existentialismus*. W. Kohlhammer GmbH, Stuttgart. (須田秀幸(訳) 1969 実存主義克服の問題 - 新しい被護性 - 未来社)
- Bollnow, O. F. 1972 *Das Verhältnis zur Zeit : Ein Beitrag zur pädagogischen Anthropologie*. Quelle & Meyer, Heidelberg. (中野・中野, 1988より引用)
- Carvajal, S. C., Clair, S. D., Nash, S. G., & Evans, R. 1998 Relating optimism, hope, and self-esteem to social influences in deterring substance use in adolescents. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 17, 443 - 465.
- Cramer, K. M., & Dyrkacz, L. 1998 Differential prediction of maladjustment scores with the Snyder's hope subscales. *Psychological Reports*, 83, 1035 - 1041.
- Dufault, K., & Martocchio, B. C. 1985 Hope : Its spheres and dimensions. *Nursing Clinics of North America*, 20, 379 - 391.
- 遠藤由美 1998 自己と適応 安藤清志・押見輝男(編) 自己の社会心理 誠信書房, p23 - p45.
- Erickson, R. C., Post, R. D., & Paige, A. B. 1975 Hope as a psychiatric variable. *Journal of Clinical Psychology*, 31, 324 - 330.
- Erikson, E. H. 1982 *The life cycle completed : A review*. W. W. Norton & Company, New York.
- Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. 1986 *Vital involvement in old age*. W. W. Norton & Company, New York.
- Evans, R. I. 1967 *Dialogue with Eric Erikson*. Harper & Row, Publisher, Inc., New York. (岡堂哲雄・中園正身(訳) 1981 エリクソンは語る - アイデンティティの心理学 - 新曜社)
- Farber, M. L. 1968 *Theory of suicide*. Funk & Wagnalls, New York. (大原健士郎・勝俣暎史(訳) 1977 自殺の理論 - 精神的打撃と自殺行動 - 岩崎学術出版社)
- Farran, C. J., Herth, K. A., & Popovich, J. M. 1995 *Hope and hopelessness : Critical clinical constructs*. Sage Publications, Inc, California.
- Farran, C. J., & McCann, J. 1989 Longitudinal analysis of hope in community-based older adults. *Archives of Psychiatric Nursing*, 3, 272 - 276.
- Farran, C. J., & Popovich, J. M. 1990 Hope : A relevant concept for geriatric psychiatry. *Archives of Psychiatric Nursing*, 4, 124 - 130.
- Farran, C. J., Salloway, J., & Clark, D. 1990 Measurement of hope in community-based older population.

- Western Journal of Nursing Research*, 12(1), 42 - 59.
- Fromm, E. 1968 *The revolution of hope : Toward a humanized technology*. Harper & Rows, Publishers.(作田啓一・佐野哲郎(訳) 1970 希望の革命 改訂版 - 技術の人間化をめざして - 紀伊國屋書店)
- Gaskins, S., & Forté, L. 1994 The meaning of hope : Implications for nursing practice and research. *Journal of Gerontological Nursing*, 21(3), 17 - 24.
- Godfrey, J. 1987 *A philosophy of human hope*. Kluwer Academic, Hingham. (Benzein & Saveman, 1998 より引用)
- Gottschalk, L. A. 1974 A hope scale applicable to verbal samples. *Archives of General Psychiatry*, 30, 779 - 785.
- 長谷川和夫 1975 老人の心理(総論) 長谷川和夫・賀芽竹子(編) 老人心理へのアプローチ 医学書院, p10 - p24.
- 橋田義雄 1953 学芸大学生の心理(1)- 苦悩と希望 - 福岡学芸大学紀要(第1・2部), 2, 31 - 37.
- Havighurst, R. J. 1953 *Human development and education*. Longmans, Green & Co., Inc, New York. (荘司雅子(監訳) 1969 人間の発達課題と教育 牧書店)
- Herth, K. 1991 Development and refinement of an instrument to measure hope. *Scholarly Inquiry for Nursing Practice : An International Journal*, 5(1), 39 - 51.
- Herth, K. 1992 Abbreviated instrument to measure hope : Development and psychometric evaluation. *Journal of Advanced Nursing*, 17, 1251 - 1259.
- 射場典子 2000 ターミナルステージにあるがん患者の希望とそれに関連する要因の分析 日本がん看護学会誌, 14(2), 66 - 77.
- Irving, L. M., Seidner, A. L., Burling, T. A., Pagliarini, R., & Robbins-S, D. 1998 Hope and recovery from substance dependence in homeless veterans. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 17, 389 - 406.
- Kast, V. 1991 *Joy, inspiration, and hope*. Texas A&M University Press, College Station, Texas.
- 加藤司 2001 HOPE 尺度作成の試み 日本心理学会第65回大会発表論文集, 939.
- 勝俣暎史 1990 希望の心理学 教育と医学, 38, 309 - 314.
- 勝俣暎史 1993 記憶療法の治療仮説 熊本大学教育学部紀要(人文科学), 42, 273 - 282.
- 桂広介 1977 希望の精神構造 青年心理, 1, 17 - 31.
- 川喜田二郎 1967 発想法 - 創造性開発のために - 中央公論新社
- 川喜田二郎 1970 続・発想法 - KJ法の展開と応用 - 中央公論新社
- 北村晴朗 1963 積極性の心理 児童心理, 17, 591 - 599.
- 北村晴朗 1975 希望の心理学 児童心理, 29, 756 - 778.
- 北村晴朗 1983 希望の心理 - 自分を生かす - 金子書房
- 北村晴朗 2001 希望と健康 日本健康心理学会第14回大会総会挨拶資料
- 北山修 1990 精神療法における希望と絶望 教育と医学, 38, 373 - 379.
- 小泉美佐子・足高美香・大黒友紀子 1998 高齢者の希望の源とその意味について 日本看護学会誌, 7(1), 25 - 32.
- 小泉美佐子・伊藤まゆみ・宮本美佐 1999 青年期の看護学生と高齢者の希望の比較に関する研究 群馬保健学紀要, 20, 103 - 112.
- 小宮山要 1977 時間的展望の心理学 青年心理, 1, 68 - 76.
- 倉石精一 1981 意志 梅津八三・相良守次・宮城音弥・依田新(編) 心理学事典 平凡社, p13 - p14.
- Lange, S. 1978 Hope. In Carlsson, B., & Blackwell, B(Eds.) *Behavioral concepts and nursing*

- interventions*. J. B. Lippincott Company, Philadelphia, p171 - p189. (Benzein & Saveman, 1998より引用)
- Lazarus, R. S. 1999 Hope : An emotion and a vital coping resource against despair. *Social Research*, 66, 653 - 678.
- Lersch, P. 1966 *Aufbau der Person, Zehnte Auflage*. Johann Ambrosius Barth, München.
- Lester, D. 1998 Helplessness, hopelessness, and haplessness and suicidality. *Psychological Reports*, 82, 946.
- Lynch, W. F. 1965 *Image of hope : Imagination as healer of the hopeless*. Helicon, Baltimore, MD.
- Macquarrie, J. 1978 *Christian hope*. A. R. Mowbray & Co Ltd., Oxford. (Benzein & Saveman, 1998より引用)
- Marcel, G. 1962 *Homo viator : Introduction to a metaphysics of hope*. Harper & Row, New York.
- Meissonneuve, J. 1948 *Les Sentiments*. Presses Universitaires de France. (山田悠紀男(訳) 1955 感情白水社)
- Menninger, K., & Pruyser, P. 1963 *The vital balance : The life process in mental health and illness*. Harper and Row, New York. (Miller & powers, 1988より引用)
- Mercier, M. A., Fawcett, J. A., & Clark, D. C. 1984 *Hopefulness : A preliminary examination*. Unpublished manuscript, Rush-Presbyterian-St. Luke's Medical Center, Chicago. (Farran, Salloway & Clark, 1990より引用)
- Miller, J. F., & Powers, M. J. 1986 Development of an instrument to measure hope. *Nursing Research*, 37, 6 - 10.
- 三好暁光 1990 希望と幻想 教育と医学, 38, 325 - 331.
- Moltman, J. 1975 *The experiment hope*. Fortress, London.
- 中野修身・中野優子 1988 開かれた未来としての希望について - ボルノーと西田哲学をつなぐもの・その3 - 金城学院大学論集(人間科学編) 14, 41 - 62.
- Nowotny, M. 1989 Assessment of hope in patients with cancer : Development of an instrument. *Oncology Nursing Forum*, 16, 57 - 61.
- Nunn, K. P., Lewin, T. J., Walton, J. M., & Carr, V. J. 1996 The construction and characteristics of an instrument to measure personal hopefulness. *Psychological Medicine*, 26, 531 - 545.
- Obayuwana, A., Collings, J., Carter, A., Rao, M., Mathura, C., & Wilson, S. 1982 Hope Index Scale : An instrument for objective assessment of hope. *Journal of National Medical Association*, 74, 761 - 765.
- 大橋明 2002 Herth Hope Scale 日本語版の作成および信頼性・妥当性の検討 老年精神医学雑誌, 13, 1187 - 1194.
- Ohashi, A. 2002 Mind-set affected hope of the elderly in Japan. *The Gerontologist*, 42(special issue 1), 22 .
- 大橋明・柏木哲夫・恒藤暁 2002 高齢者の希望に関する研究 - 希望をもたらす・弱める事象と随伴する感情 - 老年社会科学, 23(2), 171.
- 小此木啓吾 1975 「希望」の心理 - その精神分析的なとらえ方 - 児童心理, 29, 888 - 893.
- 奥村美代子・米村敦子・多久慶子・蜂谷千寿子・平野多嘉子 1995 高齢者の生活行動 九州家政学総合研究会(編) 高齢化社会と家庭生活 - 九州地区における現状ならびに課題と提言 - 九州大学出版会, p79 - p112.
- Onwuegbuzie, A. J. 1998 Role of hope in predicting anxiety about statistics. *Psychological Reports*, 82, 1315 - 1320.
- Onwuegbuzie, A. J., & Daley, C. E. 1999 Relation of hope to self-perception. *Perceptual and Motor*

- Skills*, 88, 535 - 540.
- 小山田隆明・芦葉浪久・深谷哲・中山和彦・後藤忠彦・大井修三・斉藤俊一・古川真人・宮本正一・橋良治・宮本邦雄・森和彦・村瀬康一郎 1989 我が国における第二次世界大戦前の心理学関係研究文献目録 岐阜大学カリキュラム開発研究センター研究報告, 7(1), 1 - 172.
- Plummer, E. M. 1988 Measurement of hope in the elderly institutionalized person. *Journal of the New York State Nurses Association*, 19(3), 8 - 11.
- Raleigh, E. H., & Boehm, S. 1994 Development of the Multidimensional Hope Scale. *Journal of Nursing Measurement*, 2, 155 - 167.
- Range, L. M., & Penton, S. R. 1994 Hope, hopelessness, and suicidality in college students. *Psychological Reports*, 75, 456 - 458.
- Rideout, E., & Montemuro, M. 1985 Hope, morale and adaptation in patients with chronic heart failure. *Journal of Advanced Nursing*, 11, 429 - 438.
- 斉藤武 1985 死のなかの希望とは 月刊ナーシング, 13, 1914 - 1917.
- Scheier, M. F., & Carver, C. S. 1992 Effects of optimism on psychological and physical well-being: Theoretical overview and empirical update. *Cognitive Therapy and Research*, 16, 201 - 228.
- Seligman, M. E. P. 1990 *Learned optimism*. A. A. Knopf, New York.
- 芝敬一・市川隆一郎 1990 行動異常をとまなう老人への心理・社会的対応 中川茂・市川隆一郎・藤野信行(編著) 老年心理学 診断と医療社, p129 - p164.
- 下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤真一・石原治・権藤恭之 1995 中高年期におけるライフイベントとその影響に関する心理学的研究 老年社会科学, 17, 40 - 56.
- 篠原弘章・勝俣暎史 2000 熊大式コンピタンス尺度の開発と妥当性 - 小学生の「感情・態度」および「希望」との関係 - 熊本大学教育学部紀要(人文科学) 49, 93 - 108.
- 篠原弘章・勝俣暎史 2001 熊大式コンピタンス尺度の開発と妥当性 - 中学生の「感情・態度」および「希望」との関係 - 熊本大学教育学部紀要(人文科学) 50, 203 - 217.
- 白井利明 1997 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房
- 白井利明 2001 希望の心理学 - 時間的展望をどうもつか - 講談社現代新書
- Snyder, C. R. 1989 Reality negotiation: From excuses to hope and beyond. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 8, 130 - 157.
- Snyder, C. R. 1994a *Psychology of hope: You can get there from here*. The Free Press, New York.
- Snyder, C. R. 1994b Hope and optimism. In Ramachandran, V. S.(Ed.) *Encyclopedia of human behavior, volume 2*. Academic Press, California, p535 - p542.
- Snyder, C. R. 1995 Conceptualizing, measuring, and nurturing hope. *Journal of Counseling and Development*, 73, 355 - 360.
- Snyder, C. R. 2000 Hypothesis: There is hope. In Snyder, C. R.(Ed.) *Handbook of hope: Theory, measures, and applications*. Academic Press, California, p3 - p21.
- Snyder, C. R., Harris, C., Anderson, J. R., Holleran, S. A., Irving, L. M., Sigmon, S. T., Yoshinobu, L., Gibb, J., Langelle, C., & Harney, P. 1991 The will and the ways: Development and validation of an individual-differences measure on hope. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 570 - 585.
- Snyder, C. R., Hoza, B., Pelham, W. E., Rapoff, M., Ware, L., Danovsky, M., Highberger, L., Rubinstein, H., & Stahl, K. J. 1997a The development and validation of the Children's Hope Scale. *Journal of Pediatric Psychology*, 22, 399 - 421.
- Snyder, C. R., McDermott, D., Cook, W., & Rapoff, M. A. 1997b *Hope for the journey: Helping*

- children through good times and bad*. Westview Press, Oxford.
- Snyder, C. R., Sympson, S. C., Ybasco, F. C., Borders, T. F., Babyak, M. A., & Higgins, R. L. 1996
Development and validation of the State Hope Scale. *Journal of Personality and Social Psychology*,
70, 321 - 335.
- 園田明人 2001 学習理論とストレス適応モデルからみた希望 - パーソナル・コントロールとオプティ
ミズム - *Science of Humanity Bensei*(人文学と情報処理), 37, 28 - 34.
- 返田健 1964 青年期の未来に対する展望 - 未来の職業に対する希望、期待を中心にして - *職業科学*,
4, 31 - 40.
- 総理府内閣総理大臣官房広報室 1993 高齢期の生活イメージに関する世論調査 大蔵省造幣局
- Stephenson, C. 1991 The concept of hope revisited for nursing. *Journal of Advanced Nursing*, 16, 1456 -
1461.
- Stoner, M. H. 1982 *Hope and cancer patients*. Doctoral dissertation, The University of Colorado. (Farran,
Herth & Popovich, 1995より引用)
- Stoner, M. H., & Keampfer, S. H. 1985 Recalled life expectancy information, phase of illness and hope
in cancer patients. *Research in Nursing and Health*, 8, 269 - 274.
- Stotland, E. 1969 *The Psychology of hope: An integration of experimental, clinical, and social approaches*.
Jossey-Bass, San Francisco.
- 田畑治 1975 現代に生きる子どもの期待 - 現代っ子にとっての希望とは何か - *児童心理*, 29, 794 -
802.
- 鐘幹八郎 1975 子どもの「未来への信頼」を育てるもの *児童心理*, 29, 779 - 786.
- Taylor, S. E. 1989 *Positive illusions*. Basic Books Inc, New York. (宮崎茂子(訳) 1998 それでも人は、
楽天的な方がいい - ポジティブ・マインドと自己説得の心理学 日本教文社)
- 台利夫 1975 教育相談における「希望」の問題 *児童心理*, 29, 894 - 899.
- 渡辺弘純 2002 希望の心理学へ向けて - 研究覚書 - *愛媛大学教育学部紀要(第1部教育科学)*, 48(2),
27 - 42.
- 渡辺浪二 2001 諦めると希望が見える? *Science of Humanity Bensei*(人文学と情報処理), 37, 77 - 81.
- Weinberger, M., Hiner, S. L., & Tierney, W. M. 1987 In support of hassles as a measure of stress in
predicting health outcomes. *Journal of Behavioral Medicine*, 10, 19 - 31.
- 全国老人クラブ連合会 1995 老人クラブ21世紀プランの具体化をめざして 財団法人全国老人クラブ
連合会

Hope : A review of the concept in psychology

Akira OHASHI, Satoru TSUNETO and Tetsuo KASHIWAGI

“Hope” has often been described as an elusive, mysterious and soft concept that is absolutely essential for human life. However, there have not been many studies on the concept of hope in Japan. This article deals with dominant arguments concerning the concept of hope.

Stotland (1969) described hope as an expectation greater than zero of achieving a goal, and Snyder et al. (1991, 1996) defined hope as a cognitive set that is composed of a reciprocally derived sense of successful agency (goal-directed determination) and successful pathways (planning of ways to meet goals). Conversely, Kitamura (1983) indicated that hope is distinct from aspiration or expectation. He also concluded that hope is a feeling of trust in the future and the basis of future perspectives (e.g. appetite, will, desire, or expectation), defining hope as “a pleasant feeling that accompanies the awareness of brightness in a future situation.” Erikson et al. (1982, 1986), who studied hope from the angle of trust, suggested that hope as the entire plan of man’s concerns develops in ontogenetic stages and depends on the balance between basic trust and basic mistrust.

Hope is distinct from optimism, which is a positive attitude towards the future, or the desire for any particular concrete object or one that gives an uncomfortable sensation. However, through reviewing the hope studies, it was deemed necessary to determine whether hope was a feeling (e.g. Kitamura, 1983; Kast, 1991) recognition (e.g. Snyder, 1989) or the totality of feeling and recognition (e.g. Lazarus, 1999; Watanabe, 2002).

Furthermore, there was the problem of whether “explanation” and “goal” are sufficient terms for explaining hope or not. Recent researches in psychology emphasize the explanation and goal proposed by Snyder et al. (1991, 1996) or Stotland (1969). In this standpoint, there is the intention to avoid the ambiguity concerning hope, but it should be considered that there is insufficient representation of hope. Others in psychology regarding hope as a feeling, philosophy and nursing science are apt to adopt the argument that a goal or expectation is distinct from hope (e.g. Lersch, 1966; Maisonneuve, 1948) and is a constitutive part of hope (e.g. Bollnow, 1960, Dufault & Martocchio, 1985). In this standpoint, hope has a more broadening definition but is wrapped in obscurity, so there is the possibility that hope cannot be clarified.

This article follows Kitamura’s argument and attempts to explore 1) the events of inspiring and weakening hope, 2) the feelings that accompany these events. 124 elderly

people were given an open-ended questionnaire. The events inspiring hope were identified as health, family and friend relationships, social and economical issues, hobbies, nature, religion and work. The events weakening hope were identified as health, family and friend relationships, social and economical issues, death and work.

Events inspiring hope were accompanied by positive feelings towards the past, present and future, a positive mood and interconnectedness. In contrast, the events weakening hope were accompanied by negative feelings towards the past, present and future, stagnation of a positive mood and feelings of disconnectedness between self and others.

The results suggest that hope varies with not only life events (e.g. bereavement or loss of health) but daily uplifts and hassles : hope is nurtured and lost in daily life. And, the result also suggests that hope may be accompanied by a positive mood and interconnectedness, with a central focus on a pleasant feeling of brightness in a future situation.